

## 西安近郊の三階教史跡

### ——百塔寺と金川灣唐刻石窟石經——

西 本 照 真

はじめに

筆者は一九九八年十二月二十日から二十七日にかけて、西安近郊の三階教史跡に関する調査を行った。開祖信行(五四〇〜五九四)の墓所に建立された百塔寺に関しては七〇年以上前に常盤大定氏等が行った詳細な調査報告があるが、状況は随分変わっていた。今回は、常盤氏によつて紹介されている資料や情報を中心に報告することにした。具体的には百塔寺から新出の墓碑二点、近年発見されたという「金川灣唐刻石窟石經」、西安碑林に現存する三階教関係の石碑についてである。

### 一 百塔寺

十二月二十二日と二十四日の二日間にわたり、三階教の開祖信行禪師の塔墓の地に建立された百塔寺の調査を行った。百塔寺は、終南山のふもと、西安市長安皇王莊天子峪口にあ

る。西安から約三十五キロ、車で約四十分のところにある。西安から続いていた平地がいよいよ終南山とぶつかるうとするまきにそのふもとに百塔寺はある。数百メートル手前から、銀杏の巨木が見えてくる。この銀杏は現在の百塔寺の裏庭にそびえたつ。高さ十八メートルほどで、途中で二股に分かれた幹の周囲は十メートル以上はあるかと思われる。唐代に植えられた樹木と言ひ伝えられるが、もしそうであればまさに三階教の盛衰を見守ってきた生き証人といえる。中国で二番目に大きい銀杏と言われており、百塔寺も今日では信行の墓所というよりもこの銀杏で有名である。現在では寺は南に面しており銀杏は大雄宝殿の裏(北)にあるが、元来は寺は北に面しておりこの銀杏は正院の裏(南)に位置していたという。そして、寺の東西と南に百塔寺の名のごとく数多くの三階教徒の墓塔が建っていたそうである。かつては大変規模の大きな寺だったようで、殿宇も寺僧も相当な数だったという。近所の農民の話によると、僧侶が馬にのつて山門を閉閉に

行っていたほど広大な寺院であつたという。今では三間ほどの大雄宝殿（一九八八年建立）と六間ほどの僧坊と一間の厨房があり、住僧が一人いるのみである。百の墓塔が林立していた昔日の面影はない。正面の庭は、十メートル四方に満たないほどである。本堂の本尊は釈迦牟尼仏、左は地藏菩薩、右は観音菩薩であつた。

本堂の片隅の戸棚と壁の間に、一つの小さな墓碑がほころをかぶつて立てかけてあつた。墓碑を本堂の外の明るいうちろに出してみて驚いたが、間違いなく唐代の墓碑である。この墓碑は、縦四〇・五センチ、横三二・五センチ、厚さ八・五センチほどのものであり、文字の刻まれた部分は、縦二九センチ、横二〇・五センチであつた。墓碑に刻まれた銘文は次のとおりである。

「大唐光明寺故真行法師  
之靈塔

師以永徽元年歲次庚戌

正月辛丑 朔七日丁

未酉時薨 於本寺時

年七十有七即以其年二

月庚午朔廿六日乙未建

塔樹銘於此」

文字は、唐代初頭のものにあざわしく、きつちりと端正に刻

まれている。同時代の拓本と非常によく似た字体である。

この墓碑は、三年ほど前に近所の畑から掘りだされたものを農家から買い戻したものだという。また、別の人の話では、文革時には百塔寺も相当に荒れ果て、近所の人たちは壊れた煉瓦や墓碑などを家を建てるときに用いたともいう。それらの家の一つが倒れたとき、壁の中から石碑が出てきたこともあつたそうだ。

そこで、肝心の墓碑の内容であるが、『石刻題跋索引』などを引いてみても「真行法師」の名は見当たらない。したがって、宋代以降の金石学者が注目しないままに今日に至つたのである。百塔寺に埋葬された三階教徒は、諸資料によつて名前が確認されるのは信行の直弟子五名、その後の僧侶八名、在俗者十一名、合計二十四名であつたが、これに一名が加わり二十五名となつたわけである。銘文によると、真行法師は永徽元年（六五〇）正月七日、光明寺において七十七歳で亡くなった。翌二月に靈塔が建立されている。光明寺は長安の三階五寺の一つで、慧了法師の住していた寺である。慧了は少なくとも八十四歳以上で六五六年に亡くなり、六五七年に百塔寺に塔が建立されているから、両者はほぼ同時代に光明寺に住して、没後ともに百塔寺に葬られたことになる。慧了法師は信行の直弟子であり、塔碑には「大唐光明寺故大德慧了法師銘」とあることから、寺内での地位は真

行よりも慧了の方が上であったと思われる。三階教の中心寺院であった化度寺に住していた僧に「禪師」が多いのに比べ、光明寺の二僧はいずれも「法師」である。開祖信行の没後、三階教はいくつかの派に分かれたのではないかと推定していたが、光明寺は化度寺で禅観を中心に実践していた者とは若干異なる系統の僧が住していたのではあるまいか。

また、大雄宝殿の正面脇には、九八年に農家から買い戻したという別の墓碑があった。こちらは明代のものである。縦五八センチ、横五五センチ、厚さ一三・五センチと、真行法師の塔碑よりもかなり大きいものであった。銘文は次の通りである。

「南山第一代開山住持百塔大萬壽禪寺嗣祖沙門正和尚

故佛國真淨大禪

師正公長老靈塔

大明至元六年歲次己巳七月□五日小師善亨等建」

門人 善亨 善琇 善廣

善智 善順 善潭

銘文によると正公長老が亡くなったのは明の至元六年（一三四〇）である。銘中に「百塔大萬壽禪寺」とあることから、明代に至っても「百塔」という呼称を冠した寺名が用いられていたことがわかる。三階教は唐代末期に衰亡し、宋代以降の活動の軌跡は定かではないが、名称だけは残されていたわ

けである。

以下の二碑の他、唐代の墓碑の断片と思われる破砕片が一つ、文字の読めない塔の一部がいくつか残されていた。この一帯では、畑や煉瓦工場が建てられた場所などから、墓碑が掘り出されることが珍しくないという。何年か前には、百塔寺の裏の畑から幅一メートルほどもある碑が見つかったが、そのまま埋められたそうだ。

## 二 金川湾唐刻石窟石経

十二月二十一日、陝西省社会科学院を訪問し、歴史宗教研究所副所長の王亞榮先生から貴重なお話をうかがった。すなわち、三階教典籍を刻んだ石経のある石窟が十年ほど前に発見されたというのである。おそらく日本の学界にはまだ紹介されていないことと思われるので、王氏の話をもとにその石窟石経について紹介したい。王氏はその石経を「金川湾唐刻石窟石経」と呼んでいたが、その石経のある石窟は西安から北西へ約百キロ、咸陽市淳化県金川湾にあるという。泾河のほとりの岩肌をくり抜いて作ったもので、正面の入り口は東北に向いているという。あまり大きな石窟ではないようだ。六畳ほどの広さだという。現在は陝西省文物局の管理下にある。金川湾石窟は、十年ほど前まではその存在を知っている者は地元のものでも少なかった。石窟の前に木が繁っていた

ためだ。ところが、石窟が一部崩れたために、偶然にもその存在が明らかになった。石窟には、正面に台座が据えられていたが、王氏が調査した時、すでに像は見あたらなかったそうだ。その像を囲むように、正面と左右の壁に石経が刻まれていたということである。王氏のメモ帳の「金川湾唐刻石窟石経」と記された箇所には、次のように記されていた。

「明諸大乘修多羅内世間出世間兩階人発菩提心異同法」一卷

大集月蔵分経略抄出一巻

明諸経中对根深発菩提心法

妙法蓮華経信解品第三、四各一卷

如来示教勝軍王経一卷

□□施手書

この五つの文献のうち、最初の三文献は、間違いなく三階教の文献である。『開元録』巻十八の「別録中疑惑再詳録」の中に掲げられた三階教文献名は全部で三十五部に及ぶが、その中にも最初の三文献と同一と思われる文献名が記されている。まず、『明諸大乘修多羅内世間出世間兩階人発菩提心異同法』一卷は、『開元録』の『世間出世間兩階人発菩提心法』一卷（割注は『明諸大乘修多羅内世間出世間兩階人発菩提心異法』）に相当するものと思われる。また、次の『大集月蔵分経略抄出』一卷は『開元録』の『大集月蔵分抄』一卷（割注は『大集月蔵分経明像法中要行法人集録略抄出』）に相当し、三番目

の『明諸経中对根深発菩提心法』は実際には『明諸経中对根深発菩提心法』であったのではないかと推定されるが、ともかく『開元録』の『対根浅深発菩提心法』一卷（割注「上加明諸経中四字」）に相当するものと思われる。三文献とも『開元録』記載の文献名と若干の文字の異同があるが、おそらく同一文献とみてさしつかえあるまい。四番目の『妙法蓮華経』信解品第三、四各一卷とは、『妙法蓮華経』譬喻品第三、および信解品第四のことであろう。三階教の機根論の基本的枠組みは、第一階が「一乗」、第二階と第三階が「三乗」とされるから、「火宅三車」や「長者窮子」の比喻で一乗と三乗の思想を説いたこれらの経文が刻まれるのも故なしとしない。五番目の『如来示教勝軍王経』一卷は玄奘訳であり、『大唐内典録』に「唐永徽年玄奘於慈恩寺訳」とあることから、六五〇年から六五五年の間に翻訳されたものである。このことから、「金川湾唐刻石窟石経」の成立は早くとも七世紀半ば以降ということになる。經典の内容は、如来が勝軍王に王者の心得を説いたものであり、非法を棄捨して正法に随うべきことを繰り返して説いている。すなわち王者の仏教保護を説くことが經典の主要な眼目である。また、王が所有するあらゆる身・命・財は無常のものであり、無常觀を勤修して執着を捨て去ることも力説している。

そこでこの經典も含めて「金川湾唐刻石窟石経」を刻んだ

動機を三階教史と照らし合わせて考察してみよう。三階教は開祖信行の没後まもなくの六〇〇年から七二五年にかけておよそ五回にわたる国家の禁庄を被っている。度重なる禁庄の中で、三階教徒が三階教文献を紙に筆写するよりもより確実に保存され将来に伝えられる可能性の高い石刻の方法を用いたであろうことは想像するに難くない。また、仏教の保護を説く經典が刻まれたのも国家の三階教弾圧に対する抗議の表明であろう。または、仏教を保護しない者が仏教的にどのような罪を受けることになるかを説くことによつて、弾圧の非を示そうとしたのであろう。先ほどの第二番目の文献は『大集月藏分経』の抄出であらうが、同経は国家による仏教弾圧の様相も含めて末世の法滅の姿を説いた經典であり、正法を護持することの重要性を繰り返し説いている。これらの経文を刻んだ背景には必ずや三階教への禁庄が関係していたものと思われる。

では、この石経はいつごろ刻まれたのであろうか。三階教の禁庄は六〇〇年に隋の文帝による禁庄が行われて以降、約百年間に行われていない。三階教が最も流行したのはこの時期である。次の禁庄は六九五年、則天武后の時代である。この年に三階教は異端とされ、三階教典籍は偽経・雜符録の中に加えられることになる。さらに、六九七年には活動の制限、典籍の目録からの削除がなされる。その後、八世紀初頭の中

宗・睿宗の時代には再び勢力を盛り返したことがいくつかの資料からうかがえるが、やがて玄宗の七二一年には化度寺の無尽蔵が廃止され、七二五年には活動の禁止が告げられる。このような度重なる禁庄の中で、石経が刻まれたものと思われる。あくまでも筆者の推測にすぎないが、「金川湾唐刻石窟石経」の成立は八世紀前半ではなからうか。

以上、王氏から提供していただいた情報をもとに「金川湾唐刻石窟石経」に関する考察をすすめてきた。従来、西安一帯の三階教関係の史蹟としては百塔寺が知られているにすぎなかったが、この石窟が発見されたことにより、まったく別な形の三階教史蹟の存在が明らかとなつたわけである。最初にも述べたが、禁庄の嵐が吹き荒れていた長安の都から百キロも離れた所に、三階教徒が石窟を掘り、石経を刻んでいたということはまさに驚きである。紙に筆写された三階教文献は敦煌をはじめいくつか報告されているが、石経の発見は今回がはじめてであり、きわめて重要な意味をもつものといえよう。これらの石経は、かなり壊れていて、全容は定かでないが、一部分は拓本もとれる状態だという。現在、この石窟および石経は陝西省文物局の管理下にあり、徐々に研究が開始される予定だという。その研究の成果が早期に公表されることを期待したい。

この項の最後に、金川湾唐刻石窟石経の情報を提供して下

さり、日本で紹介することを快諾して下さった陝西省社会科学院の王亞榮先生に改めて感謝の意を表したい。

### 三 西安碑林所蔵の三階教関係資料

西安の碑林博物館に所蔵されている三階教関係の墓碑等の原資料は、確認しえた限りでは、「淨域寺法蔵禪師塔銘」、「三階大德禪師碑」、「王居士磚塔銘」（重刻）、「般若波羅蜜多心經」（百塔寺出土）、「海禪師墳記」、「梁師亮墓誌銘」である。

大部分は拓本等でその内容が調査研究済みのものであり、紙数も尽きたので詳説しないが、ともかくこれらの碑銘の原石がこの碑林にあることが確認されたことだけ指摘しておきたい。

1 常盤大定・関野貞「支那仏教史蹟評解一」、一九二五年。

2 最近の西安一帯の仏寺の概況については、周文敏「長安仏寺」（一九九〇年、陝西旅游出版社）、姚雪峰「西安の名所旧跡—長安懷古—」（一九九七年、世界図書出版公司）等参照。

3 『陝西通志』に「百塔寺本唐僧信行塔院、大歴二年間（七六七—七六七年）慕信行者皆空信行塔之左右、故名百塔」とある。また、『長安志』十二「長安県」の箇所には、「興教院在東南六十里榿梓谷口、本百塔信行禪師塔院、唐大歴六年（七七一—七七一）建、皇朝太平興国三年（九七八—九七九）改」とある。矢吹慶輝『三階教之研究』一二〇—一二二頁参照。

4 拙著『三階教の研究』、一二六—一二七頁。

西安近郊の三階教史跡（西 本）

5 同九一頁。

6 大正五五、六七八中〜六七九上。

7 大正一四、七六七下〜七八九上。

8 大正五五、三二二中。

9 前掲拙著、一三〇〜一三七頁参照。

10 三階教僧師利によつて、七〇七年に『仏説示所犯者瑜伽法鏡經』が偽作されていることから、この時期、あらゆる手段を用いて三階教の思想を禁圧から守り後に伝えようとしていたことが推測される。また、中宗の景龍四年（七一〇）には勅により化度寺で無遮会が催されている。

11 『西安碑林書法芸術』、一九八三年、陝西人民美術出版社。

12 前掲拙著、八六頁以降参照。

（本研究は、平成十年度文部省科研費奨励研究（A）ならびに平成十年度武蔵野女子学院学院特別研究費に基づく研究成果の一部である。）

〈キーワード〉 三階教、百塔寺、石窟、石經、西安碑林

（武蔵野女子大学・文博）